

# TEXTURE

竜一附属中 1 回生 第 1 学年通信

2020.4.7 第 1 号

入学おめでとうございます。学年主任の中山幸昭（なかやま ゆきてる）です。これまでは、高校生と世界史を勉強してきました。中学生を担当するのは初めてですが、本校を希望して入学した皆さんや、いろいろな学校から集まってくださった先生方といっしょに、「入って良かった」と思える附属中をつくりたい。よろしくお願いします。

この学年通信の表題に掲げた、「TEXTURE（テクスチャー）」とは、附属中 1 回生のテーマとして考えた言葉です。もともとの意味は、「（織物の）質感、風合い、手触り、織り方、生地、特性、構造」です。ここに、「生徒、教師がそれぞれの目標や希望をもって集まり、かけがえのない経験を共有しながら、経糸（たていと）や緯糸（よこいと）となり、附属中・竜ヶ崎一高という新しい織物をつくりたい。また、それは価値中立的な単なる『織られたもの』ではなく、本校の歴史と伝統、高校から入学する生徒や保護者、地域・国際社会、同時に開校する他校ともクロスオーバー（異質なものを組み合わせて、あたらしいものをつくること）しつつ、最高の質感・風合いに仕上げたい。」という願いを込めました。

…と、ここまでは、もともと用意していた文章ですが、現在の社会情勢は、これまで通りの新生活の始まりをさせてくれません（ただし、竜一は中学生を迎えるのがそもそも初めてなので、何が当たり前なのか、まだ確定していない、とも言えます）。

しかし、次の展開が容易に予測できたり、結果が分かり切ったことしか起きない世の中であれば、学校に来たり、勉強したりすることの意味はほとんどないでしょう。「この先、何が起こるか分からない」からこそ、いっしょに学ぶことに意味があるのです。人間がこれまで文化として積み上げてきたものを知り、また、「社会的動物」といわれる人間ならではの関係をつくりましょう。そして、これらを強化したり、応用したりすることで、「未知の、未経験の新しい何か」に立ち向かっていきましょう。

かつて、『スピード』（1994 年）という映画で、主演のキアヌ・リーブスに「異常な状況から始まった関係は、絶対に長く続かない」というセリフがあったことを思い出しました。このような状況下で附属中を始めざるを得なかった私たちは、今後、どのような集団、学校になっていくのでしょうか？

私としては、不安な気持ちはもちろんありますが、本日、みなさんの元気な姿を見たことで、「絶対に成功する」という思いの方が断然強くなりました。

ただし、精神論だけでは乗り越えられません。3密を避けることと、検温と、うがい・手洗い（+〇ク〇ト？）も忘れずに。

## 【今後の予定】

\* 5月6日（水）まで休校です。また、会いましょう。

担任の先生より

明日以降の連絡

